

図画工作科

伝統文化から育む子どもたちの美意識

—和菓子題材「秋を味わって」の実践を通して—

中 島 敦 夫

1. はじめに

来年度から新学習指導要領が施行される。図画工作科では新たに「表現及び鑑賞の各活動において、共通に必要な資質や能力を〔共通事項〕として示す」¹⁾として共通事項が設けられ、子どもたちにつけたい力を明確にした題材や指導法の開発が求められている。そこで昨年度より、ポートフォリオ評価法を活用しながら子どもたちに「美意識」を育むための指導法の在り方について模索してきた。

今年度は、昨年度までの実践に加え、新たにタキソノミーテーブルの開発・活用を行いながら研究を行っている。本実践では、図画工作科・美術科の研究視点に伝統文化という要素を加え、子ども達の美意識をより確かなものへと育てていく実践を提案していきたいと考える。

2. 研究の構想

(1) 美意識について

美意識を附属三原学校園図画工作科・美術科では、「美しさやよさに関する価値の意識や感情」と定義している。これは、個々によって異なるものであり、子ども達に自分なりの美意識を確立していくことが目標である。それと同時に、美術教育を通してよりよい生き方を追究するという視点を加えて、個人的・主観的な価値と同時に、自分を取り巻く他者や文化とかがかわっていかうとする態度を育てている。なぜなら、文化を継承し発展させていく大きなうねりを生み出すためには、個々の美意識が他者の美意識や社会との関係の中

で伝統を理解すると同時に成長・成熟が重要であると考えからである。

(2) 子どもたちの美意識を育むために

① 伝統文化を題材にする

我が国の伝統文化は、四季とともに育まれてきたといえる。古来より絵画や絵手紙や陶芸等様々な手段で親しい相手に四季の訪れや喜びを知らせてきた。また、凧上げや七夕等、季節の行事とともに行われてきた伝統文化もある。その伝統文化を体験することで子ども達は、四季折々の美しさを自分なりに感じ取ることができ、こだわりを持って工夫をしながら表現できると考える。

また、中央教育審議会答申には、「音楽、美術、工芸、書道など、芸術文化に親しみ、自ら表現、創作したり、鑑賞したりすることが、伝統や文化の継承・発展に重要であることは言うまでもない。特に、伝統的な文化にかかわっては、音楽科や図画工作科、美術科では、唱歌や民謡、郷土に伝わる歌、和楽器、我が国の美術文化などについての指導を充実し、これらの継承と創造への関心を高めることが重要である。」²⁾とある。今後、図画工作・美術科の中で我が国の伝統文化について触れる機会を設定することで子どもたちの美意識を豊かにしていくことが求められている。

② ポートフォリオ評価法の開発・実施

学習における成長を子ども自身が認識することで学習効果を高めることや、学習の過程で生じた学びを評価するためにポートフォリオ評価法を取り入れる。

- ・自己の振り返りとして
- ・既習事項の確認及び新たな発想のヒントとして
- ・コミュニケーションの手段として

・評価方法として

③評価の指標（タキノミー）の作成

タキノミーとは、ブルームの提唱した評価の考え方で、教育目標が以下の3つの領域に整理されている³⁾。

・認知領域：知識の記憶や活用

・情意領域：興味、態度、価値観の変容や鑑賞力や適応性の発達

・精神運動領域：運動技能や操作技能

これらの3領域を簡潔に要約すれば、認知は知

表1 「秋を味わって」のタキノミーテーブル

認 知 領 域	知識の次元	認知プロセス次元		
		1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
知 識 領 域	事実的知識 (美術用語、造形の要素と原理)	今までに自分が経験したことを季節と結びつけながら思い起こすことができる。 和菓子の作り方やその由来について理解することができる。	自分の感じた季節感を表すための道具・材料を適切に選択することができる。	秋の和菓子作りの活動を通して、色の変化や形の面白さから感じる季節の新しい趣きを感じ取ることができる。
	概念的知識 (題材のテーマのコンセプト)	和菓子の菓銘について理解することができる。	自分の感じた季節感を表すために作品と菓銘を関連づけている。	なぞかけを通して相手のよさを伝える活動を通して、新たな自分らしさを掴むことができる。
精 神 運 動 領 域	手続的知識 (表現の技術と技法、批評・鑑賞の方法)	3つの味わうポイント(目で見る・耳で聴く・口で味わう)を理解し、実践することができる。 和菓子作りにおける基本的な技法・技術を習得することができる。 作品のよさを菓銘やなぞかけにして表すことができる。		自分のイメージを表すために適切な技法を選択しながら和菓子を作ることができる。
情 意 領 域	感情の次元	情意プロセス次元		
		1 受容する/反応する	2 価値づけする/組織化する	
情 意 領 域	興味・関心・態度	和菓子を通して、形や色から季節感を感じることができる。	自分の感じた季節のイメージを表すために形や色にこだわりを持つことができる。	なぞかけ観賞会の活動を通して、自分自身や他者の作品のよさや美しさを感じることができる。
	美的な価値観 (美しさやよさに関する価値の意識や感情)	和菓子との出会いから、自分なりの季節のイメージや思い出を思い起こすことができる。		
メ タ 認 知	メタ認知の次元	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	
	自己知識	ポートフォリオなどからこれまでの学習を思い出している。	和菓子作りや観賞の活動を通して、自分のこだわりを感じ取っている。	
	自己調整		相手に自分の思いが伝わるように改善すべき点を見つけることができる。	

識・理解、情意は感情・情緒、精神運動は技能・技術に関する領域と見なすことができる。近年、クラスウォールらによって、ブルームが提唱したタキソノミーを継承・発展させた「新タキソノミー」が提唱されている。本研究ではこの新タキソノミーを美術教育の評価に応用するべく、認知領域・情意領域・精神運動領域の3領域に加え、価値の形成の側面として「メタ認知」を上位に置いた目標群の試案を作成した(表1参照)。これらの目標群にそって題材ごとに具体的な目標を設定し、美術教育の新しい評価方法の開発を進めながら美意識の育成を図っていく。

3. 実践

(1) 授業の構想

- ①題材名 : 「秋を味わって」
- ②学年 : 第4学年(76名)
- ③実施時期 : 11月
- ④題材について

和菓子は、お茶会やおもてなしの席で振る舞われ、私たちの生活に身近なものである。食べて味わうことのみが注目されがちであるが、ある時は写実的で、またある時は抽象的な季節の顔を映し出す和菓子には、職人の伝統の技や歴史、文化が散りばめられている。これらを感じ取るために「見て、目で味わう」「菓銘を聞いて、耳で味わう」「食べて、舌で味わう」という3つの味わい方がある。子どもたちにとって目と耳で味わうという視点は新鮮なものであり、そこに込められた季節感を感じ取るにはよい手段となりうる。また、伝統文化という視点からも和菓子の菓銘や技法には積み上げられてきた先人の知恵や工夫があり、それらを感じ取ることで子どもたちの感性がより豊かになると考える。

⑤児童について

子どもたちは、2年生の時に生活科で和菓子工場を見学した経験があり、和菓子を生活の中で身近なものとして感じている。アンケート(平成22年8月27日実施37名)によると和菓子から日本

の伝統文化を連想した子どもは22%、和菓子から季節を連想した子どもは30%であった。和菓子を身近に感じていながらも和菓子に込められた背景やその奥深さなどについて理解している子どもが少ないことが分かった。

⑥指導にあたって

和菓子との出会いの場面では、目で観察し、菓銘を知り、食べて味わうというように五感で和菓子を感じることで出会いを印象的なものにしていく。単元全体を通して五感を働かせながら、感性を豊かに発揮できるようにする。和菓子作りでは、テーマの季節である「秋」のイメージをしっかりと持てるように野外観察やマッピング等の形式で季節あつめの活動を行う。また、職人が使う道具(三角棒、漉し器)などを使い職人の思いや願いを感じ取れるようにする。鑑賞会はなぞかけ形式で行い、子ども達が工夫して楽しみながら、作品のよさを伝え合うことができるようにする。

(2) 題材の目標

- 和菓子の由来や込められた思いから、和菓子や我が国の伝統文化に興味を持つことができるようにする。
- 季節のイメージから自分の表したい形や色、菓銘を思いつくことができるようにする。
- 季節のイメージに合うように道具を効果的に使い、形や色を工夫して表現することができるようにする。
- 表し方のよさや菓銘の発想の面白さに気づき、自分の作品に生かせるようにする。

(3) 評価の指標

本題材の目標をもとにタキソノミーを表1のように設定した。特に①季節のイメージ②自分らしさとそのよさを感じ取ること③他者の作品を見ていく視点作りの3点を意識して作った。これらを盛り込んでいくことで指導と評価が一体化して行われ、つけたい力がより明確になるようにした。

(4) 指導計画

- 第1次 和菓子を味わおう・・・1時間
- 第2次 和菓子を作ろう・・・4時間
- 第3次 なぞかけ観賞会をしよう・・・2時間

(5) 授業の概要

〈第1次〉和菓子を味わおう

目標

和菓子との出会いから表現の工夫や和菓子にこめられた思いに気づくことができる。



図1 導入で観賞した和菓子

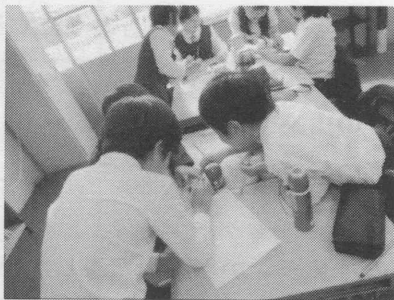


図2 想像を広げながら観賞をする様子

導入ではまず、本物の和菓子4点(図1)を子どもたちに紹介した。これらの和菓子は子ども達が2年生の時に見学をした和菓子屋さんで作られたものである。自分たちになじみ深い店の和菓子ということで子どもたちは興味を持って見ていた。

和菓子をどこで味わえばよいか聞いたところ、「口で味わう」という意見に加え、見た目がきれいなので「目で味わう」という意見が出た。そこで、「見て味わう」というポイントを確認し、和菓子を観賞した。以下のような理由で子どもたちは、お気に入りの和菓子を見つけていた。

①を選んだ理由

- ・つぶがたくさん集まっていてかわいい。
- ・栗がおいしそう。

②を選んだ理由

- ・柿の色がどくどくで黄色・オレンジ・緑色・茶色があっておいしそう。
- ・形が本物の柿そっくりだから。
- ・ヘタまで細かく作っている。

③を選んだ理由

- ・ピンク色と白色が交わってすごくきれい。
- ・サクラの形みたい。
- ・もようや花のところがうまくできている
- ・何かで線を入れていてすごい。

④を選んだ理由

- ・オレンジと黄色の変わり方がきれい。
- ・色が多い。
- ・紅葉が秋っぽい。

色に着目したり、形が本物に似ているか、また、表面の線に着目したりして職人の技術に関心を持っている子どももいた。子どもたちそれぞれが自分なりのみ方で和菓子を味わっていた。

その後、菓銘を子どもたちに知らせ、4つの和菓子の共通点を聞いてみた。すると、和菓子のモチーフ、色や「栗」「柿」「色づき」のキーワードから4つの和菓子は秋をイメージして作られたものであることに気づいた。この時に初めて、菊は秋の花であると知った子どもも多かった。

最後に和菓子を「食べて味わった」(図3)。和菓子を初めて食べる子もおり、あんこが苦手だった子もおいしそうに食べていた。和菓子の三つの味わい方にふれ、今後の学習に興味を持っていた。



図3 和菓子を味わう

〈第2次〉季節から想像しよう

目標

自分のお気に入りの秋のイメージを形や色を工夫しながら表現することができる。

○ 和菓子を作る

続いて、秋をもっとよく知り、楽しむために和菓子を作ることにした。マッピング(図4)を行い、秋のイメージを膨らませた後に自分の作りたい和菓子のレシピを描か

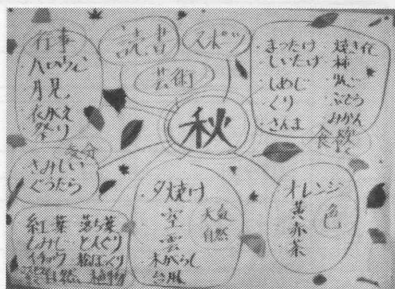


図4 イメージマップ

せた。また、事前に観た和菓子のDVDが技法や道具を知る上で重要な資料となった。和菓子作りの材料は、本物を使うと観賞会までに傷んでしまうため紙粘土を使用した。着色には、食用色素を使用し、本物の和菓子と同じ繊細な色合いを表現できるようにした。子どもたちは、DVDで観た和菓子職人の技法を思い起こしながら、色のグラデーションを表現したり、三角棒や漉し網、楊枝等を巧みに使ったりして自分たちの表現したいものを作っていた。



図5 技法を生かしながら作る

網を使ったきんとんの色から新たなイメージを作りだし、秋の山を表現する子どもの姿もみられた。このように様々な技法から新たに生み出される形や色から刺激を受け、想像を広げながら子どもたちは活動することができていた。

※子どもたちが使用した技法

- ・グラデーション
- ・重ね巻き
- ・型抜き
- ・きんとん
- ・茶きんしぼり
- ・粉ふり
- ・三角棒を使った線付け

○ 菓銘をつけ、なぞかけを考える

完成後、自分の感じた秋が伝わるような菓銘を考えた。事前に菓銘を考えてから和菓子を作った子どももいた。次に、自分の作品のよさが伝わるようななぞかけを考えた。なぞかけを作る手順は表2の通りである。改めて自分の作った和菓子と向き合って、なぞかけを作っていた。

表2 なぞかけを作る手順

A	とかけまして、	B	ときます。その
心はCでしょう。			
①Aには、和菓子の菓銘を入れる。			
②Cに自分の作った和菓子のよさを入れる。			
③Bによさとつながるものを当てはめる。			

〈第3次〉なぞかけ観賞会をしよう

目標

和菓子の菓銘とその特徴をもとにしたなぞかけでのやりとりを通して、お互いの表現や考え方のよさを味わう。

なぞかけ観賞会では、まず作品をよりよく楽しむためのツボについて確認をした。子どもたちからは、3つの味わうポイントを意識して「よくみる」「よく聴く」という2つの意見が出た。

次に、グループでなぞかけの交流を行った。観賞会では、話すことが苦手な子どもも安心して観賞会に参加できるようにやり取りルール(表3)を示した。

その後、全体での観賞会を行った。お互いのよさに気づくことができるようにするために、自分が面



図6 鑑賞会の様子

白いと感じた友だちの作品となぞかけを紹介し合い、お互いのよさを感じていた。

表3 やり取りルール

やりとりルール (なぞかけ鑑賞会)	
作	「○○を作りました。菓銘は、△△です。」
鑑	「いいですねー」
作	「△△とかけまして」(全員が復唱する。)
	「□□と解きます。」(復唱する。)
	「その心は？」
鑑	「(・・・なので)・・・だと思います。」
	(グループ全員が、言うようにする。)
作	「心は、■■です。・・・をみてください。」
	(理由を説明する。)
鑑	「(作者の心を聞いて感想を伝える。)」
※	作者→作 鑑賞者→鑑

4. 考察

タキソノミーテーブル(表1)を作った3つの視点に基づいて、子どもたちの作品や学習の様子、ワークシート、アンケート結果をもとにして、子どもたちに美意識が育まれたかという視点で考察をする。

①自分なりの季節のイメージをこだわりを持ちながら表そうとしていたか。

マッピング(図4)では、子どもたちは固定の観念にとらわれずにアイデアを出し合い、お互いの秋に対するイメージを広げることができた。その結果、題材のテーマはバラエティに富んだものになった。

また、「自分なりに工夫をしながら秋のイメージを表すことはできましたか」に対するアンケート結果(表4)では、92%の子どもが、肯定的回答をしており、自分のイメージを効果的にあらわすことができたと感じている。否定的回答をした7%の児童は、技術が追いつかなかったり、制作中に失敗をしたりした点を挙げていた。

表4 アンケート結果

よくできた	できた	あまりできなかった	全くできなかった
54%	38%	5%	2%

表5 技法を使った割合

技法の種類別	粉ふり	36%
	グラデーション	34%
	きんとん	29%
	線付け	26%
	重ね巻き	25%
	型抜き	13%
	茶きんしぼり	5%

自分のイメージを表現するにあたって全体で88%の子どもたちが、何らかの技法を使っていた。こだわりを持って表現するのに和菓子作りの技法が役に立っていたといえる。また、それぞれの技法を使った子どもの割合は、多くても36%であり、大きな偏りが無い。(表5)これは子どもたちが自分の表現をしていく上で適切なものを選んだからである。また、技法を使っていない子どもたちも図7のように季節を意識し、着色に気をつけたり、自分の表現したいものを手で細かく表現したり、棒を指して団子みたいにする工夫をしたりして表現できていた。



図7 児童の作品例

②自分の作品と向き合いながら、よさを感じて、菓銘やなぞかけを作ることができたか。

アンケート結果(表6)から自分の作品のよさを感じながら菓銘やなぞかけを作ることができたことが分かった。また表7にあるように菓銘はバラエティに富んだものが多く、作品の特徴を一言

で表すことができたものが多かった。

なぞかけは、作品の形や色などの構成要素をしっかりとらえて書かれたものが54%でそれ以外の要素で書かれたものが46%であった。

表6 アンケート結果

	よくできた	できた	あまりできない	全くできない
菓銘	53%	42%	5%	0%
なぞかけ	67%	33%	0%	0%

表7 菓銘の一例

秋のおとずれ、一輪の菊、うさぎロール、和の風・秋虫、お月見の夜、風に舞う秋、もみじのなえ、夏から秋の変わり 等

○ 色を意識したなぞかけの一例

・「もみじのなえ」とかけまして、「野原」とときます。その心は、どちらも緑です。

○ 形を意識したなぞかけの一例

・「秋のお化けあめ」とかけまして、「だんご」とときます。その心は、どちらもまん丸です。

○ 構成要素以外を意識したなぞかけの一例

・「夏から秋の変わり」とかけまして、「空」とときます。その心は、どちらも変化が激しいです。

・「風に舞う秋」とかけまして、「ツバメ」とときます。その心はどちらも空に羽ばたきます。

構成要素以外で書かれたなぞかけには、子どもたちが想像を広げて書いたものが多くみられた。なぞかけという手段は、よさを再認識できるものの構成要素からよさを感じさせる手段ではなく、子どもたちの想像をさらに広げる手段に適していることが分かった。

③なぞかけ観賞会から他者の作品のよさや美しさを感じることができたか。

なぞかけ観賞会でのワークシートから

Aさんの作品に対して

○ 菓銘「色の変身」

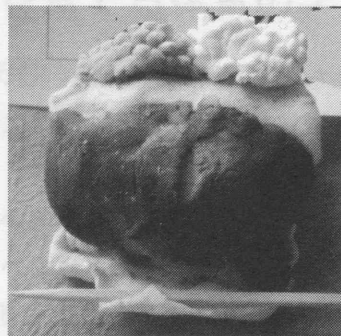


図8 児童作品「色の変身」

○ なぞかけ

「色の変身」とかけまして、「クリスマスのイルミネーション」とときます。その心はどちらも色の変身の達人です。

○ 子ども達の感じたよさ

- ・色合いがよかった。菓銘が秋を感じる
- ・菓銘通りに作っていて本当に紅葉しているみたいだった。

Bさんの作品に対して

○ 菓銘「秋を運ぶうさぎ」

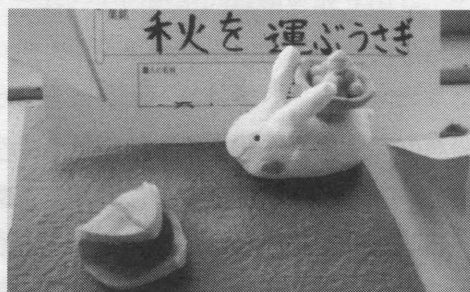


図9 児童作品「秋を運ぶうさぎ」

○ なぞかけ

「秋を運ぶうさぎ」とかけまして、2011年とときます。その心はどちらもうさぎがメインです。

○ 子ども達の感じたよさ

- ・うさぎの形がすごくにっていて、すごかったから、色もきれい。
- ・すごく季節感を感じるし、菓銘も秋らしくて作品にあっている。

- ・うさぎが秋を運んでいるみたいですごい。形もきれいに整っている。

子どもたちは、なぞかけを与えられるとじっくりと対象を観賞していた。よさの中には、形や色など構成要素に着目した言葉もあり、み方が育っていることが分かる。しかし、なぞかけの心が感じたよさの中に直接的に生かされていなかった。

子ども達の感想にあるようになぞかけを通しての活動は楽しく、お互いのよさを認め合うような活動にはなっていた。しかし、難度が高く、抽象的なものはよさが伝わりにくかったようである。

なぞかけを通した観賞は、目的や効果をもう一度検討し、今後改善の必要があることを感じた。

子ども達の感想から

- ・みんなすごかったし、工夫があってよかった。なぞかけが面白かった。
- ・みんなが、すごいと言ってくれてうれしかった。
- ・みんな、なぞかけがうまくてぜんぜんわからなかったけど、楽しかったです。

お互いのよさを感じ取るための観賞の方法についての改善や未だ実践していない高学年での実践など今後へ向けての課題も残っている。これから和菓子を初めてとした伝統文化をテーマにした題材の開発・実践を行っていき、子ども達の美意識を育てていきたいと思う。

〈注および引用文献〉

- 1) 文部科学省：「小学校指導要領解説 図画工作編」p. 5, 2008, 日本文教出版株式会社.
- 2) 中央教育審議会：「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」, 2008.
- 3) 梶田叡一：「教育評価〔第2版補訂版〕」, pp. 36-39, 2002, 有斐閣双書.

5. おわりに

伝統文化（和菓子）を通して美意識を育む実践を行った。和菓子の実践は子ども達の美意識を育てていくうえで有効なものであったといえる。子どもたちは、今まで知らなかった和菓子の持つ新しい一面に興味を持ち、意欲的に学習に取り組んでいた。廊下に展示している作品を見つめ、友だちの作品のよさをみつけながら会話が盛り上がっていた姿が印象深かった。

私自身、和菓子を題材にした実践は昨年度に続いて2年目であった。昨年度は、2年生での実践を行い、技法の使い方等で発達段階における表現の高まりを感じることができた。また、季節を秋に限定したり、鑑賞の視点を示すなど題材へのアプローチの仕方などを工夫改善したりすることができて大変有意義であった。